

4) 腹部大血管病変

坂下 勲 (立川総合病院)

腹部救急医療として臨床上出会う疾患には、1) 腹部大動脈瘤、2) 胸部大動脈解離の腹部大動脈への進展、3) 急性腹部大動脈閉塞が挙げられ、このうち頻度の高いのは1)で、ことに破裂したり、その危険のある場合が正しく救急治療の対象となる。

実体を知るため、昭和45年以降当院で経験した1)および2)の破裂例14例を含む手術症例67を検討した。

年代別に症例は昭和55年からの5年間は13例で、昭和60年以降本年までは49例と3.8倍増加し、破裂例もそれぞれ2例から12例となった。平均年令も年代が経るに従い64.8±12才から68.4±7.3才と高くなり、最高年令は83才で対象例に高齢者の多いことも明らかであった。男女比は5:1であった。

症例を本県の第2次保健医療圏に準じその分布をみると、長岡、上越、小出および柏崎圏はそれぞれ15、14、13および10例と多く、かつ県下の広い地域におよんだ。

症例を非破裂例と破裂例に分け、その手術死は0/53例および5/14例で $p<0.00$ と高い有意差を示した。

従って本疾患による死亡率を下げるには、腹部に拍動性腫瘍と触知し、その径が5cm以上なら破裂の危険があると判断し、5cm以下で腹痛や腰痛を訴えるならその原因を明かにする必要がある。

瘤破裂の初発症状は腹痛や腰痛がほとんどで、全身所見として確定診断まで経過中にショック状態に落ち入る頻度は高く、局所所見では腹部に拍動性腫瘍が弾性硬の腹壁隆起を触知する。

治療は随伴するショックなど全身状態の異常を速かに修正し、人工血管による病変部の置換を要する。

5) 産婦人科領域の急性腹症

布川 修 (新潟南病院産婦人科)

ここ10年間で経験した急性腹症の手術例125例を分析し、産婦人科領域の急性腹症を検討してみました。その内訳をみると、子宮外妊娠58例、卵巣腫瘍の茎捻転50例、卵巣嚢胞の破裂8例と妊娠に関係するものと、卵巣疾患にともなうものがほとんどであったが、最近になり、化膿性卵管炎や卵管水腫などの感染にともなう急性腹症の増加傾向がみられた。

産婦人科の急性腹症の治療の特徴は、その疾患の性質からみて生殖生理的機能をいかに温存してやるかにかかっている。したがって早期診断がその予後を左右するといっ

て過言でない。その診断であるが、CTや超音波診断などの画像診断は勿論有力な手段といえるが、産婦人科特有の病歴や、病状の把握、妊娠反応をふくめたホルモン測定、ダグラス窩穿刺など経腔的な腹腔内検査などではほとんど確診される。したがってその治療も早期であればあるほど卵巣や卵管の機能を温存させることが可能である。当科の成績をみても、発症からの経過がながいほどその予後は不良であった。ちなみに、既往に子宮外妊娠で一側の卵管しかない症例で、再度子宮外妊娠となり、胎嚢摘出術、卵管形成術を行い、その後妊娠成立し、成児を出産した2症例を経験しておるだけに、生殖機能の温存に努める必要があることを強調したい。また、感染症による骨盤腹膜炎が急増しているだけに、早期に適確な抗生剤療法が、卵管の機能を障害しないためにも必要であり、日常診療上では手術にたよらず、臨床経過と慎重に観察する症例のあることを強調しておきたい。

6) 泌尿器科領域の急性腹症

森下 英夫・中嶋 祐一 (長岡赤十字病院 泌尿器科)
安藤 徹 (燕労災病院 泌尿器科)

泌尿器科領域の急性腹症としては、結石、外傷、炎症、尿閉等があげられる。なかでも尿管結石は最も多く、長岡赤十字病院救急救命センターの泌尿器科来訪患者の4割以上を占めている。上部および中部尿管結石は血尿、側腹部痛を中心に診断するが、下部の場合は膀胱炎様症状を来すことが多く、注意を要する。外傷に関しては腎外傷、尿道外傷が多いが、手術の必要があるか否かが問題となり、全身状態を含めた検索が必要となる。炎症も疼痛を伴うことが多く、膀胱炎と腎盂炎の鑑別、副睾丸炎や前立腺炎の存在、細菌性の疾患か否かなどに注意して、化学療法を行っていく必要がある。また膀胱に尿がたまり排出できない尿閉は、下腹部に非常な苦痛を伴うものであるが、この基礎疾患がなんであるかを見極め、治療していくことが大事であろう。前立腺肥大症、尿道狭窄、神経因性膀胱等とともに、薬剤やアルコールによる影響も忘れてはならない。その他に睾丸回転症も若年男性がよく起こす疾患であるが、緊急手術の対象になるものであり、鼠径ヘルニアや副睾丸炎との鑑別は早急になされなければならない。また腎梗塞や腎腫瘍などによる急性腹症も決して稀ではなく、注意が必要となる。